

「ロイヤルファミリーとして」

～あなたは自分の立場を知っていますか？～

I ペテロ 2 : 9

■ ロイヤルファミリー

I ペテ 2 : 9 の御言葉を読むたびにロイヤルファミリーであることを思われるのです。「選ばれた種族、王である祭司……」。つまり私たちは王であるイエス様の所有であり、王族なのです。誰かがロイヤルファミリーでなければいけないということではありません。「あなたがたは」というので、私たちすべてのクリスチャンに言われています。

祭司とは、律法を司る人のことを言います。旧約の時代、至聖所一度、大祭司しか入ることができませんでした。いのちがけの行為でした。また、民は祭司のもとにいけにえをもって行き、祭司を通して神にいけにえをささげて祈っていたのです。普通の人々は祈りたくてもできませんでした。

このように、私たちは神の所有として、素晴らしい権利が与えられています。それと同時に果たすべき責任もあるのです。

■ 私たちは大使であり大使館

そしてまた、私たちクリスチャン一人一人は日本にいる神の国の大使とよく言われます。王の家族であり、ロイヤルファミリーでありながら神の国の法律を治する神の国の大使館なのです。大使館の権限というのはこの大使では自国の法律が優先であって、遣わされた国の法律は適応されないのです。私たちに神の国の法律があります。誰も侵害することはできません。しかし、唯一侵害することができるのは唯一、私たちなのです。

また、大使館は自分の国の文化や伝統をほかの国の人たちにお知らせする役割があります。伝え、理解を深めてもらうのです。だから私たちはキリストの大使として、聖書が何であるか、イエス様の福音がなんであるかを伝える、説明して紹介するという責任があるのです。

みなさんはロイヤルファミリーとして、王族として、また、大使としての自覚を持って日々生活しておられるでしょうか。

■ 「しかし、あなたがたは…」

「しかし、あなたがたは」とは、この手紙の受け取り手は、現在のトルコの各地に散らばっていたクリスチャンたちに向けてでした (1:1)、その中心は異邦人でした。新約と旧約の違いは何よりも、アブラハムの子孫であるユダヤ人に向けて語られていたはずの聖書の教えが、異邦人にも向けられ、彼らがキリストへの信仰のみによって神の民とされたということです。私たちがその意味で、アブラハムの子孫とされたのです。

「しかし」という接続詞が入っているのは、2章 6-8 節に記されているように、「尊い礎石」であるイエス・キリストを「つまずきの石、妨げの岩」として拒絶している人との対比を明らかにするためでした。

主こそ十字架にかけられたイエスであることを、「主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です」(2:4) と記されています。

つまり、「あなたがたは、しかし」ということばに、神の民とされた者は、イエスも自分たちも、この世とは全く異なった視点から見ると呼ばれていることを指し示しているのです。私たちはその点で、しばしば、あまりにも自分をこの世の価値基準から見すぎているのではないでしょうか。ただし、それはこの世の基準をまったく無視して良いという意味ではありません。大切なのは、この世の基準を無視することではなく、神の国の基準を持ち、それによって人や自分の価値を認めることができるかということです。

そのために何よりも必要なことは、イエス様による救いのみわざを心の底から体験することです。私たちの目は、この約束されている救いの豊かさ、素晴らしい特権は、なかなか見えないものかもしれませんが、イエスの十字架により、救われていること。それこそがこれらすべてのことの保障です。ですから、私たちは王家の一員として、いつでも、神の視点から自分を見る必要があります。

■ 「あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり」

「あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり」なお、「あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方の素晴らしいみわざ」とありますが、私たち人間はエデンの園の外という「やみの中」に置かれていました。しかし、「ご自分の驚くべき光」という神の御子のご支配の中に招き入れられました。

私たちは、何よりも、「やみから光へ」のろいから祝福へ「絶望から希望へと」、置かれる立場を移していただけたのです。それは私たちが自分の知恵や力や、また自分の信仰の力によって獲得したのではなく、一方的な神のあわれみによって与えられたものです。

また、ペテロはそれに続けて、「あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です」(10 節) と語っていますが、その背後にはホセア書 2 章 22,23 節の記述があります。

そこでは預言者ホセアの妻でありながら浮気ばかりをしたゴメルから生まれた三人の子のろわれた名前を主が祝福の名に逆転させてくださるという約束が記されています。

『わたしの民でない者』という意味から『あなたはわたしの民』と言う逆の名前に変え、その子も神に向かって『あなたは私の神』と呼ぶように変えられるということです。

三人の子どもの名が祝福の名に変えられるということは、私たちひとりひとりが先祖伝来の悪習から自由にされ、新しくされることの象徴と言えます。あなたは自分の家系に流れていた「のろい」の連鎖が、祝福の連鎖へと変えられたのです。先祖から引き継いでいる負の遺産、自分の過去の過ち…それらの古い債務証書は全て破り捨てられたのです。そのことをみなさんは自覚しているでしょうか？

そのあなたたちはもう、世の中の人々とは全く違う目線で見なくてはなりません。私たちは特別なのです。その皆さんにおすすみされていることがあります。

■ I ペテロ 2 : 11 ~ 21

この御言葉から抽出されるテーマは「ふるまい・ことば・従う」という事になるのではないかと思います。取り分けられたあなたがたには果たすべき責任があるといわれています。

この地上では世の中に遣わされた神の国の大使なのです。ですから違う国の法律の中にある中で戦うことがたくさんあります。それは私たちの内側にあるといわれています。あの人がこうしたから自分はこうなると、人のせいにする心。あの人がこう言われたから傷ついた。と言って目線は常に外側を見てしまいますが、違う国の法律の中で生きていけば理不尽なことはたくさん起きます。クリスチャン同士でも人が違えば考え方も違うこと違うわけですから、全く違うのです。結局自分の心で何を思うか、その思いが神の国の法律とどう違うか。すり合わせて行かないといけないのです。それが大きな戦いなのです。

〈ふるまい〉

私たちは神の国の大使です。奴隷ではありません。この世の悪い習慣が神の国の法律にはそぐわないと感じた時に、私たちは神の国の大使、神の国の子どもとしてどうするかということはずごく注意深く考えなければならないのです。周りがそういうからはい分かりました。とその通りにやるのではなく、立派にふるまわなければなりません。

〈ことば〉

ふるまいとことばはセットです。どうして、ふるまいとことばがセットなのかということ、無言だけでもふるまう人がいます。言葉がなくて、行いがすばらしい人はその人に賞賛が行きます。神様には賞賛は返りません。反対に、なぜこの人はこんなに良くしてくれるのかと問われた時に、これは神様がしてくれたことです。神様が私にしてくださったことをしただけです。と神様を伝えることができるのです。ことばで表すチャンスになるのです。また、逆にことばは良いことを言っても行いがともなっていない人がいればどうでしょう言っていることが違うということになります。どちらにしても、その人に注目が集まっています。

ことばがなくて良い事をする人、言葉があっても行動しない人これは実話同じ種族なのです。神様に栄光を返していないのです。だから、ふるまいも大事ですし、ことばも大事なのです。

〈従う〉

聖なる国民、王なる祭司として従うのです。神の国の法律とその他国の法律が相反するときに、ただ間違っているから従わない、反抗するのはなくて、どのようにしたらこの国の人々が神の国を知ることができるのか、を私たちは神様に聞き従い実践していくのです。ですから、自分が王族の一員だとわかっていないとそのようには立ち振る舞うことができません。そして、聖なる国民とされていてもそこにイエス様がいなければ意味がありません。どちらかを選択するのではなく「イエスキリストの十字架」を選択する者になりましょう。

さいごに

「野の獣がわたしをあがめる。ジャッカルや、だちょうさをも・・・わたしの民、選んだ者に飲ませるから」ところが、イスラエルの民は、「祭司の王国、聖なる国民となる」という崇高な使命を果たすことに失敗したばかりか、大失敗したのです。そのことがイザヤ 4 章 3,4、18-21 節では次のように記されています。一番自分がダメな時にも、神はこのように私たちを呼んで下さっているのです。『わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。…』(イザヤ 43 : 4)

この神様の圧倒的な愛の呼びかけに応じて、神に選ばれた民、ロイヤルファミリーの一員として歩んで行くではありませんか。

(要約者:行司 澤口 建太)

(2023年8月20日)